

吉祥  
社  
管絃

# 博多 22

—博多遺跡群第57次(房州堀推定地)の調査概要—

1991

福岡市教育委員会

## 序

現在、福岡市は21世紀のアジアの拠点都市を目指して生まれ変わろうとしています。この福岡市のウォーターフロントに位置する博多遺跡群は、弥生時代から中近世にかけて大陸文化の門戸として栄えた遺跡で、いわば國際都市・福岡を代表する歴史遺産の一つであります。これまでの60数次を越える調査で、博多の歴史を解明するうえで貴重な発見が相次いでおります。

今回は、中世末の博多の要害であります房州城の推定地の調査を実施いたしました。直接、堀の構造を発見することはできませんでしたが、堀の変遷を考えるうえで重要な知見を得ることができました。

発掘調査から資料整理までご協力いただきました株式会社カイシン興業をはじめとする多くの方々に感謝するとともに、本書が地域の歴史を理解するための一助となれば幸いです。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口 雄哉

## 例 言

1. 本書は、博多区祇園町557番外に所在する博多遺跡群第57次調査の記録報告書である。
2. 本書に使用した現場写真、遺構・遺物図面、範囲は小畠の手による。
3. 遺物の写真撮影は坂千帆が行った。
4. なお、本書には調査成果とあわせて、文献史学・人文地理の立場から佐伯弘次氏（福岡大学人文学部）と小林茂氏（九州大学教養部）、自然科学の立場から磯望氏（西南大学文学部）、野井英明氏（九州大学理学部）の諸先生から検討を加えていただいた。
5. 本文の執筆および編集は小畠が行った。

調査番号	8947	調査略号	HKT-57
調査地番	博多区祇園町557番地外	分布地図番号	大神49 A 1
開発面積	1770.29m <sup>2</sup>	調査対象面積	1770.29m <sup>2</sup>
調査期間	1989年10月3日～10月6日		224m <sup>2</sup> (トレチ)

## 本文目次

I	調査の経緯と経過	1
II	調査地点の位置と環境	2
III	調査の方法と結果	2
IV	まとめ	8
V	考察	

1.	文献および絵図・地図からみた房州堀	福岡大学人文学部助教授 佐伯弘次
		九州大学教養部助教授 小林 茂 …… 9
2.	博多第57地点の地形と地質	西南大学文学部教授 磯 望 …… 16
3.	博多第57地点の花粉分析	九州大学理学部研究生 野井英明 …… 20

## I 調査の経緯と経過

さる1988年8月6日、福岡市教育委員会文化部埋蔵文化財課に対して、カイシン興業より、福岡市博多区祇園町557外地内における埋蔵文化財の有無の照合があった。これに対し埋蔵文化財課では、申請地が博多遺跡群（福岡市埋蔵文化財地図49-A-1）に入るため事前調査が必要な旨を解答した。協議の結果、該地において試掘調査を実施することとし、同年8月18日に試掘を行った。この結果、最下層の砂層中より多量の遺物が出土し、発掘調査が必要であると判断された。しかし、遺構が未検出だったため、申請地内の家屋解体の終了をまって1989年5月18日再度試掘を実施した。この結果、河川の落ち際が認められ、堰の立ち上がりではないかと予想された。このため、同年10月3日から10月6日までの4日間発掘調査を実施した。

### 調査の組織と構成

調査委託 株式会社カイシン興業

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 佐藤善郎（前任）

調査統括 埋蔵文化財課長 柳田純孝

埋蔵文化財課第2係長 柳沢一男

調査庶務 埋蔵文化財課第1係 松延好文

調査担当 埋蔵文化財課第2係 小細弘己

調査作業 高浜栄一、中道秀雄、深川晶弥、福澤山次郎、船越恒人、仲上文子、脇坂レイ子



Fig. 1 既応の調査と第57次調査地点位置図 (1/900)

## II 調査地点の位置と環境

調査地点は、福岡市博多区祇園町551-1、557-2、557に一致する。博多道路群の南西隅にあたり、房州堀推定地内に含まれる（Fig. 1）。標高は3~4mである。房州堀とは、「筑前国統風土記」に、大友氏の家臣白井安房守鑑兼が掘らせたとその伝承が記載されている堀のことであり、博多の南境を巡る要害であった。

## III 調査の方法と結果



Fig. 2 調査区位置図 (1/2000)

ており、堀を埋立た際の遺構の可能性もある。

層序 (Fig. 3) は、第1トレンチを例にとると、第1層 客土 (厚さ80cm)、第2層 茶褐色  
上と白色粗砂の互層で、水成の堆積物 (厚さ50cm)、第3層 暗茶褐色混砂土層 (厚さ約40cm)、

調査は調査区を横切るように大トレンチを2本と小トレンチを1本の計3本をいれて行った (Fig. 2)。基本的に溝の底まで機械力で掘削し、土層の観察に主眼を置いた調査であった。この結果、第1トレンチの南17.5mのところで近現代の石垣を検出した (Fig. 3)。これは基底層の砂層上にある水成土の面まで達し



Fig. 3 第1・2トレンチ土層断面図 (1/200)

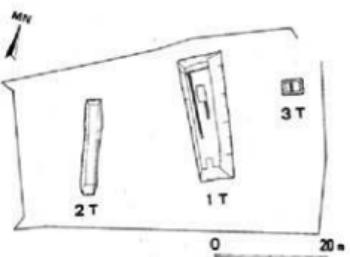


Fig. 4 トレンチ配置図 (1/1000)

幅20cm前後の溝状の造構が平行しており、水田に伴う暗渠か畝の痕と考えられる(Fig. 4)。これは、後世に堤の内部が水田として使用されていたという文献上の記述と一致する。しかし、調査区内では堤の立ち上がりは検出できなかった。

第4層 暗青灰色粘土層(厚さ20cm)、第5層 暗灰褐色粘土層(厚さ25cm)、第6層 灰褐色砂質粘土層(厚さ10cm)、第7層 白～褐色粗砂層(厚さ不明)である。遺物を含む層は第4・5層と第7層で、第4・5層からは18・19世紀代の肥前系陶磁器を主体とする近世雜器類が、第7層からは弥生時代から中世末(16世紀)までの遺物が出土した。

この河川堆積の粗砂で構成される第7層上

には、上部の粘土層と同質の土を覆土にもつ



Fig. 5 第1トレンチ土層断面（東から）



Fig. 6 第1トレンチ全景（南から）



Fig. 7 第2トレンチ全景（北から）

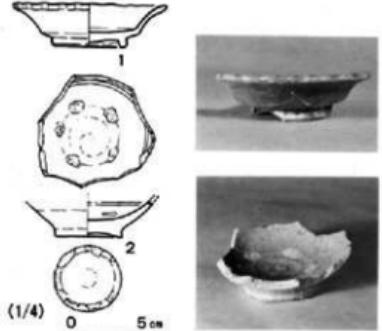


Fig. 8 第3トレンチ全景（南から）

出土遺物 (Fig. 9~13)

〈第1トレンチ 第7層〉 1は青磁の皿である。2は李朝の灰釉陶の底部破片である。15~16世紀の所産である。

〈第1トレンチ 第4・5層〉 3~9は唐津系の陶器である。3は腰折れの碗で、鉄絵の文様を描く。6は京焼風の皿の破片で、高台無釉。



7~10は刷毛目の碗である。7は白橙色、8~10は灰黒色の生地を使用している。11は李朝の白磁碗であろう。青白い釉を施す。胎土目を欠き取る。12は唐津系陶器の皿であろう。見込に砂目を残す。13は褐釉陶器の破片である。外面に貼り付けの装飾があるが、全体形は不明。

14~28は伊万里系の染付磁器である。

14~18はくらわんか碗である。14は山水文、15は梅樹文、16と17は草花文、18は雨降り文

を描いている。14の裏面には「大明成化年製」

の銘がある。16と17は薄くシャープな高台部をもち、同じ型式の製品である。19と20は筒型碗である。19の口縁内面は無釉で、蓋物であろうか。21はそば猪口の破片である。22は小型瓶である。23は段重の蓋である。格子や波、草花を描いた丸文を8個配する。24は型打ちの角鉢である。内壁に牡丹唐草文、見込に五弁花文、外壁に草花文を描く。底裏銘は方形枠内に「福」字である。25は大皿の破片である。底裏面にハリの痕が認められる。26は色絵の皿の破片である。口唇と外面に赤色の團線、内面に青色の顔料の文様を施す。破片断面には漆緋ぎの痕跡が認められる。27は皿の破片で、内面区割り内に七宝文、外面に唐草文を描く。28は皿であるが、色絵の素地である。内面に草花の茎と葉のみを骨彫で描いている。

29は焼塙壺の蓋である。内面に布の圧痕が残る。31は、同じく焼塙壺の破片で、「織」の刻印が認められ、おそらく「堺湊伊織」の刻印であろう。

30は土製の小型硯で、両側面と裏面に文字が刻まれている。左側面は「すずりい志」、右側面は「元治元年(1864年)」、裏面は「瓦町陶屋山崎馬吉」とある。また底面に墨書があるが、判読できない。陸部に墨の痕跡が認められるが、當時の使用に耐えたものとは考えられず、儀礼用か玩具として用いられたものであろう。この山崎家は『筑前国続風土記附録』に「瓦…(中略)…今博多瓦町に瓦師數家あり。其中に惣右衛門・新左衛門といふ者有。惣右衛門が先祖を喜多村甚左衛門といひ、新左衛門が先祖を山崎惣右衛門といへり。共に元は播磨の産にて瓦を

\* 刻文の解説と文献の照合については、三木隆行氏(福岡市文化課)の協力を得た。



Fig.10 第1トレンチ第4・5層出土遺物 (1/4)

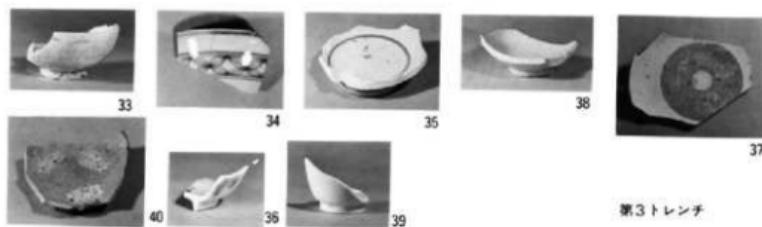


Fig.11 第1・3トレンチ出土遺物

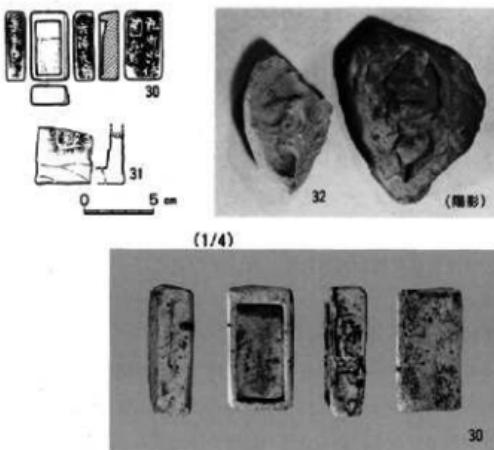


Fig. 12 第1トレンチ第4・5層出土遺物

焼て業とせり。」とある黒田藩の御用瓦師の末裔であろう。また同書には瓦町陶として「博多瓦町・紙園町邊に、瓦器を製する家六七戸あり。火鉢・火ちりん・手爐など數品を製す。」とあるように瓦町界隈では、瓦器類の生産が瓦師およびその末裔たちの手によって盛んに行われていたことが窺える。この馬吉とは19世紀中頃に瓦町に住んで、瓦器を生産した陶工と考えられる。

32は人形の粘土型である。半分欠損しているが、般若の顔の型である。

〈第3トレンチ〉 第1トレンチの第4・5層に相当する層から出土している。

33-36は伊万里系の染付碗である。33は小型の碗で二対への文字を描く。34は二圈線の内に七宝文を描く。36は草花文と底裏面に銘があるが、細片のため全文は不明。37-39は肥前系の白磁の皿、碗、猪口である。37の見込は蛇の目状に釉をぎ取っている。40は李朝の灰釉陶の碗である。

これ以外に、各トレンチからは第4・5層から瓦、火鉢、ひちりん、すり鉢、香炉などが出土している。よって、この粘土層とその上層は17世紀末から19世紀代と考えられる。また、最下層の第7層は16世紀までの遺物しか包含しておらず、河川によって運ばれた砂層に封じ込められた、再堆積の様相を示している。

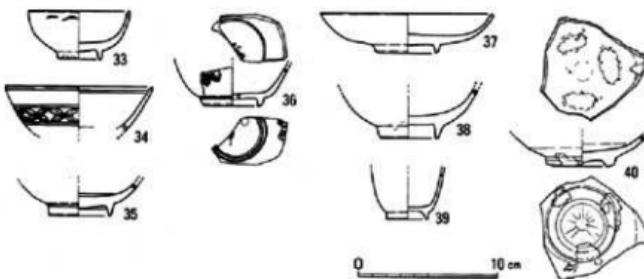


Fig. 13 第3トレンチ出土遺物 (1/4)

## IV まとめ

今回の調査では、残念ながら明確な堀の立ち上がりを検出することはできなかった。しかし、堀内部の堆積状態を把握し、堀の中が明暦（1655～1658年）の初めには次第に田になったという『筑前国統風土記』の記述と一致する調査結果を得たことは大きな成果であった。これは、野井氏の花粉分析の結果とも矛盾しない。また、この堀が、18世紀の中頃以降ゴミ捨て場として利用されたことも考えられる。ただし別の地点ながら、文政四年（1821）に成立した『筑前名所図会』には堀が田畠として使用された様が描かれており、堀の埋立は、より後世（例えば明治22年の博多駅築造）とも考えられる。この点については、遺物の細かい層位ごとの時期分けが必要とされ、今後の課題であろう。

また、堀の底と規模の問題がある。最下層の第7層は16世紀代以前の遺物しか含まず、河川の堆積物である。これより上の層は、次第にシルト化し水田基盤上の粘土層を形成しているよう、堆積環境の継続的な変化が認められる。シルト層の段階では若干の水の流れがあった模様である。よって、少なくともこの地点では、堀の掘削があったというよりもむしろ旧比恵川の流れに堀の護岸を施すという性格のものであったと考えたい。これらの諸問題の解決には、堀の北側の境に調査区を設定して調査するしか方法がないが、これは、それらが道路と民地、民地と民地の境にあたるため不可能に近く、期して他日を待つ以外にない。

これまで、博多遺跡群の調査で明確に房州堀にあたる遺構を検出しているのは、地下鉄の祇園町P2出入口の調査のみである。この堀はSD-03で、断面形が逆台形を呈する幅6m、深さ1mほどのものである。中からは中世末から近世初頭の遺物が出土している。この調査では当該期の遺構が多く検出されており、博多浜南側の他地点と様相を異にしている。この時期の溝、堀、井戸などの遺構は、博多第17・20・21・22・28・33次調査で検出されているが、その密度は低い。博多浜の南側砂丘においては16～17世紀の遺構・遺物が少なく、14世紀以降近世まで、欠落した感があるというのが最近調査者の間で定着しつつある。この時期は、房州堀の施工者と想定されている白井安房守の館や矢倉門など堀とともに整備された町並が形成されていたはずであるが、後世の区画整理によって消滅の運命をたどった可能性が高い。

## V 考 察

### 文献および絵図・地図からみた房州堀

佐伯 弘次 小林 茂

(福岡大学人文学部助教授) (九州大学教養部助教授)

#### はじめに

戦国時代の自治都市博多は、東が石堂川、内が那珂川、南が房州堀、北が海によって囲まれ、それぞれが都市を防衛する機能を果たしたといわれる。南の要害である房州堀は、戦国時代に大友氏の家臣によって造られたとされているが、その築造を物語る同時代の史料は、皆見の歴史現存しない。そこで、近世史料等によりながら、文献・絵図・地図にみえる房州堀について述べたい。

#### 1. 近世地図にみえる房州堀

房州堀について多くを記しているのは、「筑前国統風土記」(宝永6=1709年、以下「統風土記」と略す)以下の近世地図である。「統風土記」は、房州堀について、「南の方の外郭に、横二十間余の堀の跡ありて、瓦町の西南のすみより、社堂の東に至る。是南方の要害の固なり。其上堤今もあり。此堀を房州堀と号す。白井安房守謙廣といひ人はらせたる故なりといふ。然れば元龜・天正の比、始て築しなるべし。或は其前大内家守護の時よりも、此要害有しを、白井氏修補せしにや、いまた詳ならず(脚注を略す)。明暦の初、やうやく田と成しかど、其堀の形残りて、今もあらはに見ゆ。」と記している<sup>1)</sup>。すなわち、①近世の博多の南の外郭に、瓦町から社堂に至る横(幅)20間余の堀の跡が存在したこと、②その堀は房州堀と称したこと、③堀の名称の由来は、白井安房守謙廣(あきつぐ)が築らせたことに因ること、④明暦の初年(明暦元年は1655年)に堀は田地となり、「統風土記」成立当時、その形が残っていたこと等を述べている。ただし、築造の時期については、元龜・天正のころ白井氏が築いたものか、あるいはその

前の大内時代に築造されていたものが、白井氏によって修補されたのかについては、断定を保留している。

「統風土記」は、白井謙廣が、この房州堀以外に、石堂川の削削を行ったとのべている。

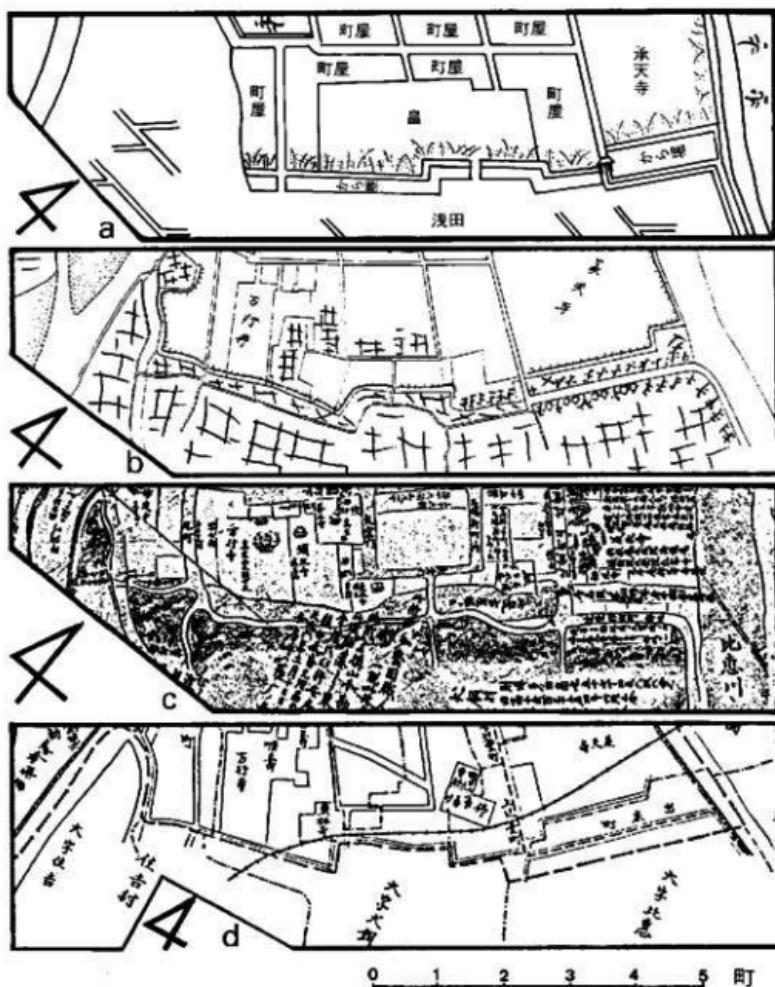
「此川吉吉はなりしを、大友の家臣白井安房守謙廣はらせたりと云。故に今川と云。むかしは比叡川は博多と作吉の間を通りしか、川の流西にめぐりて、洪水の時、水勢あらく、水災多じて、南より北へ直に通りて、松原の内を通す。是則今の石堂川也。昔は承天寺、聖福寺の裏邊箱崎の松原につきて、今の川ある所も、もとより松原也しなり。」<sup>2)</sup>

博多の南を守る房州堀の築造と、東の境界線である石堂川(比恵川・御笠川)の開削を、同一人物が行ったとするのである。石堂川の削削についても、同時代史料が残っておらず、その真相の究明は文献史学だけでなく、考古学・人文地理学・自然地理学等の学際的研究が必要であろう。

近世中期の博多の地図「石城志」<sup>3)</sup>(明和2=1765年)も、「統風土記」と同様の記述をしている。ただし「石城志」は、博多の南側にあったとされる矢倉門についても、白井氏の築造とする点が、「統風土記」と異なっている。すなわち、「元龜のはじめ、大友の家臣白井安房守謙廣、博多に堀を構へ、南方に塗を堀、門を建たリ。其所を今に矢倉門と云」と記している<sup>4)</sup>。矢倉門についても中世史料ではなく、石堂川の開削と同様の学際的研究が望まれる。

#### 2. 近世絵図にみえる房州堀

房州堀は近世以降の絵図・地図類にも描かれて



- a. 正保3年(1646)「福博惣繪図」をスケッチ  
 b. 元禄12年(1699)「福岡御城下絵図」(ただし「福岡県史第2巻」(1963年)  
 付図4に加筆)  
 c. 文化9年(1812)「福岡城下町・博多・近隣古図」  
 d. 明治24年(1891)「福岡市全図」

図1. 近世～明治期の絵図・地図にみる房州堀

いる(図1)。正保3年(1646)の博多絵図(図1-a)には、博多の南側に堀を描いており、「から堀」(空堀)という注記がある。この空堀の北側すなわち博多側に、土下らしきものがあり、竹のような植物が植えられている。空堀は、西側(丘町)、中央部(矢倉門)、東側(辻堂)の3か所に、南側への通路がある。また堀は、矢倉門付近で北側に入っている。辻堂の門より東の部分は北側に若干ずれており、この部分の堀の南側には、堀にそって道路が走っている。堀の南側は田となっている。

次に、元禄12年(1699)の博多絵図<sup>④</sup>(図1-b)でも、正保園同様、房州堀を描いている。正保園では、矢倉門の北側が畠地であったのが、元禄図の原図では道路が矢倉門へと伸び、東林寺が堀の北側に描かれている。さらに、房州堀の内部は田のように表現されており、「続風土記」の記述を裏付けている。堀の北側の植物は、一部松らしき木に変化している。惣の南側は、辻堂から瓦町の方に向へ細い道路が伸び、水天寺の南側には作出町が描かれている。正保園と元禄図を比較することによって、約半世紀間における博多の都市景観の変化をうかがうことができる。

文化9年(1812)年の博多絵図<sup>27)</sup>(図1-c)にも、房州堀の跡が記されている。ただし、この文

化岡では、房州驛を、承天寺の南側の部分すなわち石堂川から辻堂までの部分としており、辻堂より西側は「古居駅」と記している。

明治24年(1891)の福岡市街地図(図1-d)にも、房州堀の路が記されている。その線は基本的に近世松島の線と変わっていない。この房州堀周辺は、明治22年(1889)に九州鉄道が開通し、博多停車場が設置されて、大きく景観が変化した<sup>14)</sup>。その後の都市開発によって、房州堀周辺の景観は一変し、現在に至っている。

なお、近世後期の地誌「筑前名所図会」(文政4年=1821年)には、当時の房州堰の景観が記されてい る<sup>100</sup> (図2)。(佐伯)

### 3. 近代以前の農業地主とその位置

上記のように房州堺は明治22年（1889）の博多駅（旧）の設置により大きく変化した。当時の景観は充分に明らかではないが、明治24年（1891）の福岡市街図（図1-d）にみられるように、鉄道が房州堺を横断することにより、すくなくともその一部は大きく破壊されたと思われる。また房州堺に接する東林寺・八幡神社は移転、辻堂御門は取りこわしを余儀なくされ、承天寺も寺域をせばめることとなつた<sup>(11)</sup>。

明治39年(1906)～41年(1908)になると、さらには

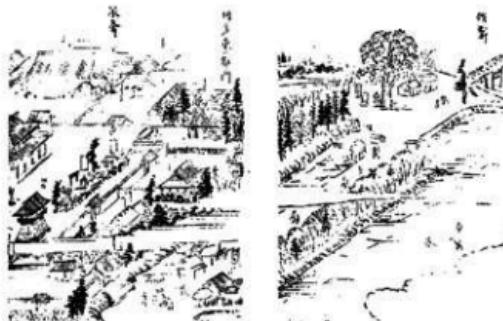


図2. 「筑前名所図会」(文献出版 1985) より  
(作出町〔のちの出来町〕の景観)

博多駅の拡張・改築がおこなわれた。これに際しても、承天寺をはじめとする周辺の地権者が用地を提供した<sup>13)</sup>。この拡張によって、房州堀の中央部一東部の景観はほとんど失われることになった。明治33年(1900)測量の2万分の1地形図、明治44年(1911)部分修正の2万分の1地形図(いずれも大日本帝国陸地測量部)からこれがうかがえる。大正末~昭和3年(1928)ごろに都市計画用に作製されたと推定される3000分の1地形図<sup>14)</sup>(図3)になると、この状況はさらによく示されている。

房州堀付近の景観変化にとってもうひとつ決定的であったのは、第2次大戦後の博多駅地区土地区画整理事業であった。博多駅の移転(昭和38=1963年)にともない、房州堀の中央部一東部の街区が一変してしまったのである<sup>15)</sup>。

以上のように明治以降大きくみて3度の変化をこうむり、また付近の市街地化・区画整理も逆行して、房州堀がどの位置に存在したのか比定することすら困難であるが、その手がかりがないわけではない。明治24年の福岡市街図(図1-d)にあきらかなように、房州堀中央部・西部の北緯は、当時福岡市と那珂郡堅粕村(大字大鷗)および同郡住吉村の行政界となっていた。また東部は、福岡市出来町と承天寺の立地する上社堂町の境界にはほぼ一致していたと思われる。とくに上記堅粕村大字大鷗の、万行寺南側まで西に細くのびる部分の形状は近世絵図(図1-a~c)の房州堀の形状ともよく一致する。この行政界は、図3にともぎれ

ながら二点鎖線として記載されており、房州堀の景観がなくなつて以降も意義をもつてゐたことが明らかである。関連して注目されるのは、「博多駅地区区画整理誌」に付載された「区画整理前町界町名図」(574頁)にみえる町界で、小縮尺ではあるが房州堀の中央部の形状と思われるものがよく示されているだけでなく、「宇堀田」という房州堀に関連すると推定される字名も記入されている<sup>16)</sup>。

以上をもとに、博多駅地区土地区画整理事業に際して作製された「從前圖」および「換地図」(いすれも500分の1、福岡市都市整備局区画整理課蔵)によって、上記「大字大鷗字堀田」の境界ならびに出来町と上社堂町の境界を記したのが図4である。ここでは区画整理事業域外についても、図3等をもとに房州堀の範囲の推定線も示している。これによって、房州堀の位置がほぼあきらかになったといえよう。これからすれば、万行寺南側より西方にかけてみられる段差は、房州堀の北緯に一致していることになる。

(小林)

#### 4. 白井氏と博多

房州堀の名称が、白井露姿の官途「安房守」に因むことを近世地誌は記している。この白井安房守露姿なる人物について検討しよう。

白井氏は人友氏の一族戸次氏の庶流であり、豊後國白井莊に上着したため、白井氏と称した<sup>17)</sup>。この白井氏には、安房守露姿なる人物はいない。戦国期の白井氏で安房守を称したのは、白井安が

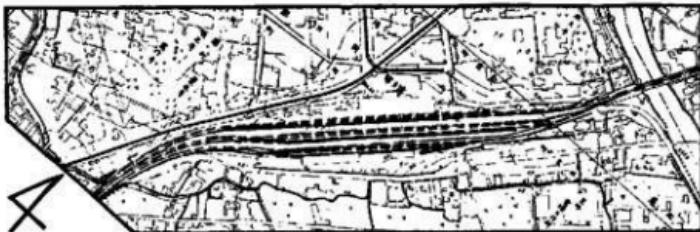


図3. 大正末~昭和初期の房州堀とその周辺(3千分の1(推定)を縮少)

守鑑統（あさつぐ）がいる。鑑統は長景の子で、大友義盛の時代に、筑前国志摩郡代・椎子岳城督を勤め、また、義盛・義頼期に大友氏の加賀衆を勤めた。永禄4年（1561）に没。その弟鑑康（しげつぐ）は、新介と号し、鑑統の跡をうけて志摩郡代・椎子岳城督となつたが、天正6年（1518）、日向高城において戦死した。また、一族には、永正中期から天文中期まで志摩郡代・椎子岳城督を勤めた白杵安芸守親通がいる<sup>(19)</sup>。戦国期に筑前国に在し、博多に開拓した白杵氏は、白杵親通・鑑統・鑑頼の3名である。したがって、「続風土記」以下の近世地誌が、「白杵安房守鑑統」とした人物は、白杵安房守鑑統のことであると考えられる。白杵安房守鑑統と白杵新介親通の名前が重なつて、白杵安房守鑑康なる人物が登場したのであろう。

志摩郡代であった白杵氏は、糸島郡に多くの関係史料を残している<sup>(20)</sup>。博多とは、親通の時代から関係を有していた。大永8年（1528）9月2日、博多称名寺回禄による再興に關して、親通は称名寺と大友氏の間の取り次ぎをしている<sup>(21)</sup>。享禄2年（1529）、博多津に逗留していた対馬商船に対して、大友氏側が公事を懸けるという事件がおこつた。対馬島主宗氏は、平遣使を博多に派遣し、大友氏側と交渉を行つた。この時、対馬守護代宗盛康は、白杵親通に対して、「可万預御取合候、奉願候」とのべている<sup>(22)</sup>。この事件は、白杵親通の「御人魂之故」をもつて、翌3年5月に解決した<sup>(23)</sup>。白杵氏と博多との関係が知られる。

また、大友氏の朝鮮への使船派遣に際しても、白杵親通が取扱ををしている<sup>(24)</sup>。大友氏の志摩郡代白杵氏は、大友氏領博多興浜の支配に開拓すると同時に、朝鮮貿易およびそれと関係の深い対馬宗氏との交渉にも開拓したのである。白杵氏は、室町期の博多興浜代官田原氏<sup>(25)</sup>の権限を繼承したということができよう。戦国期に、博多興浜代官田原氏は不安定な動きをするので、志摩郡代の権限が博多にも及んだのであろう。

白杵親通と博多の関係を物語るのは次の史

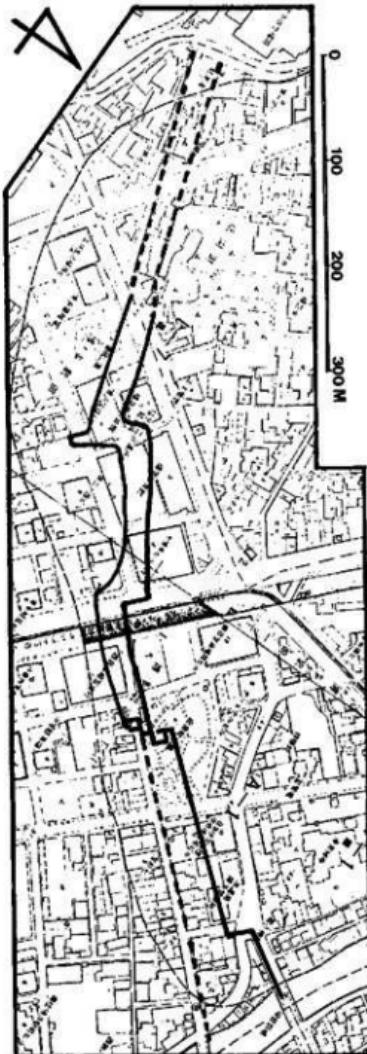


図4. 房州堀の位置（実線は旧大字犬飼字坂田の範囲、出来町と上辻堂町の境界による。破線は推定線）

科<sup>(23)</sup>である。

(包紙ウハ書)

「怒留湯長門守殿	白井安房守
平井中務丞殿	鑑続
各御中	」
冷泉津橋田宮祝大夫下地職事、先日令中候之處、 被成御分別、被打渡之由候、尤可然候、兼又彼 御領之内金丸名之事、御灯坊被申事、同前被 遂披露之山、兩申次一通、為御被見道之候、為 御公領被相拘持、御入魂尊一候、御判之儀、 御雜務時分、可被仰出皆候、恐々謹言、	
十二月五日	鑑続(花押)
怒留湯長門守殿	
小田郡民部入道殿	
大津留和泉守殿	
田吹左衛門尉殿	
岐部揚部助殿	
夏瀬民部少輔殿	
森五郎兵衛尉殿	
胡麻津留左京亮殿	
平井中務丞殿	

鶴田宮の社領に関する文書である。前半は、神官祝大夫の抱える下地職の打渡しを取り次いだもので、後半は鶴田宮領金丸名を「公領」として抱えるようにのべたものである。怒留湯以下の9名は筑前國檢使と考えられている。「被成御分別」「御判之儀、御雜務時分、可被仰出」とあるように、大友氏と鶴田宮の間にあって、大友氏の命令を施行したのである。この論地が志摩郡内にあった可能性もあるが、いずれにしても博多との関係は明らかである。

白井氏は、鍋島の代になっても、対馬宗氏と交渉を持った。永禄8年(1565)9月7日、対馬島主宗義潤は、E1井新介(鍋島)に対して、「如仰、報達、鑑続以來申通候事、無其報候」とのべている<sup>(24)</sup>。対馬宗氏との交渉および朝鮮との関係は、引き続き白井氏が管轄したのである。

## 5. 考 索

以上、房州堀と白井氏についてのべたが、最後に築造の時期と築造主体について考察を加えたい。

まず、築造の時期について検討しよう。房州堀の初見史料は、現在のところ、正保3年(1646)の絵図に記された「から堀」である。これ以前の博多の絵図としては、室町時代のものとされている「聖福寺古跡<sup>(25)</sup>」がある。この絵図の成立は永禄6年(1563)以前である。この絵図では、聖福寺と承天寺の東側に堀があり、承天寺の東南の角で西に曲がり、承天寺の門の付近で切れている。ここには、博多の南部を貫通する堀=房州堀も石童川も共に描かれていません。したがって、この「聖福寺古跡」の成立時には、房州堀も石童川も存在しなかったと考えられる。「聖福寺古跡」の成立年代については、今後の研究をまつより他にない。

次に、中世の文献史料から、房州堀築造の年代を考えてみよう。応永27年(1420)、朝鮮の日本回札使宋希理は、博多を訪れた時、「博多は城郭なく、城路は備えがない。夜々賊が起り、人を殺しても追撃する者がいない。」と記している<sup>(26)</sup>。九州探題浜川氏は、宋希理一行の来日を契機として、治安維持のために、博多の城路に門を作らせ、夜にはこれを閉ざすようにした。この当時、南の要害房州堀は、まだ掘られていないかったと考えられる。永禄2年(1559)、筑紫准門の軍勢が博多を襲撃した時、市民は防戦したが、私俗の内通によって、博多の町は筑紫氏に占領された<sup>(27)</sup>。博多に入った筑紫勢は、市の門を閉鎖し、門番を配置した。これは筑紫氏が新たに門を作ったのではなく、從来からある施設を利用したものと考えられる。永禄2年以前に博多の町には防衛施設があり、門を開めることによって、外部との出入を遮断することができたのである。これ以前に博多の南側にも何らかの防衛施設が存在したと考えられる。それが房州堀であるかどうかは不明であるが。ともあれ、房州堀の築造年代は、1420年から1646年の

間、さらに限定すると、博多が自治都市として榮え、かつ薩摩で戦乱が頻発した戦国時代と考えた方が妥当であろう。

次に、駿の製造者の問題に移ろう。近頃の博多に、戦国期に白井延蔵が掘らせたという伝承が残っていたことは、その可能性もありうることを意味する。しかし、一次史料がなく、白井氏によるものと断定することはできない。残る可能性を二つさぐってみよう。一つは、「続風土記」にも記しているように、大内時代に掘られたという可能性である。大内氏は、造船船派遣に際して、博多に港を構造しており<sup>100</sup>、堀を掘った可能性は十分に

三

12. 「天正四被墨土記」巻之四博多・78頁(名文出版、1973年復刻)。

13. 「筑前國通風土記」巻之四博多「石室」の項、97頁。

14. 九州公論社、1977年。

15. 「古石室」、31頁。

16. 「福岡地誌誌」福岡市立歴史博物館資料200(4-8-129)。

17. 「福岡城跡下鉢跡」福岡県立図書文庫地誌資料65。

18. 「福岡地下町・近隣古跡」九州大学人文系九州文化史研究助成研究会、福岡県考古研究会(本文社、1976年)の復刻による。

19. 福岡市役所(福岡市役所)、刊行、横書堂、1991年。

20. 小川治郎著「博多墨土記」69頁、潮鳥社、1986年復刻。

21. 「筑前各藩圖」「作州の恩」『天守の鏡』「筑州府の鏡」「吉野神社の鏡」など、文藝出版社、1985年。

22. 広島市刊行「博多末天寺史」30-32、322-324頁、文獻出版、1977年。博多終戸5半町福岡県会議会「博多駅歴史館年のあゆみ」27-28頁、同委員会、1977年。

23. 「博多末天寺史」32-33、324-328頁、「博多駅歴史館年のあゆみ」73-84頁。

24. 横川市議会公認蔵の本作の件については不明な点が多いが、昭和6年までには福岡市下市の都市計画区域について作製されたといっている3000分の1地図「赤真珠圖」(内務省所管の都市計画圖、「都道府縣圖」、144号、1967年)と思われる。なお記述内容から本地図は平成10年以前、昭和3年以前の作成と考えられる。また福岡市が都計画施行都市に指定されたのは平成12年、さらに周辺町村もふくめ福岡市が都計画区域に指定されたのは平成14年である(都心部周辺博多駅周辺部が昭和4年、「博多地区区域整備計画」、福岡県、1974年)。

25. 「博多駅地区区域整理規則」。

26. この部分の参考町名の変更は、昭和44年に実施された(『福岡市』、568頁)。

27. 新旧の町名を対比するには、「博多地区町界町名変更圖」(福岡市、1966年、3000分の1)および「博多駅周辺地区町界町名変更圖(博多区)」(福岡市、1969年、5000分の1)が便利であるが、範囲で問題があり、区間整地事業の作業時に作製されたこれらの図を用いた。

28. 伊藤昇著編「大友京橋のすべて」179頁、新入林作美社、1986年。

29. 以上、臼杵井については福岡一惟「大友家臣源流事典」(筑前大名家臣源流事典、西園園社、新入林作美社、1981年)。

30. 竹内三重「萬葉の古文書」(九州文化史研究所叢書)5・6号、1966-1973年。

ある。いま一つの可能性は、博多町人による築造である。自治都市理と同様に、町人が都市の防御のために、都市の周囲に堀をめぐらすことは十分に考えられることである。戦国期の博多の町には、そうした条件は整えられていたとみてよい。断定はできないが、大友氏(臼杵氏)、大内氏、博多町人という三つの可能性を指摘しておきたい。

房州塙の跡は、現在では完全に地上から姿を消している。しかし、博多の地下には、その遺構が後世のかく乱を受けながらも残っているはずである。今後の発掘調査によって、房州塙の実体が明らかになることを期待したい。(佐伯)

(6) 鹤多珍名寄文書大永8年9月2日白柿楓通書狀(『沉前田經風上記附錄』上巻129頁、文献出版、1977年)。

- ②「人本學派」の北野景昇著『竹舟』25号 9月 7日 京成書店 (日本中興社)「封外關係と文化政策」、思文閣出版、1982年)。

③「廻」 57号 平成3年 5月 26日 京成書店

④「廻」 25号 3月 3日 京成書店

○佐伯次郎「中後期都博多の連携と立場」(『日本中世史論叢』、文献出版社、1987年)。

○鶴田伸社著「鶴田伸社藏品目録」資料写真、福岡市立歴史委員会、1987年)。

○「奈良引付」(『奈良引付』8号《永禄8年》9月 7日 京成書店 (西田毛子著)「對馬氏の『國家羽翼』梵文」、「日本女子大学文学部紀要」34号、1985年)。

○河原町二丁目東アジアの国際都市博多136頁カラーグラビア(よみがえる中街1、丸光社、1988年)。

○「老舗日本手帳」63頁(晋遊文庫、岩波新書、1987年)。

○「フローラ日本史」6卷(大蔵出版) (中央公論社、1975年)。

○佐伯次郎「中世後期都博多と大内氏」3頁(『史編』121號、1984年)。

(付記)

本稿は、昭和62～平成元年日本生態学研究会助成（代表：小林  
暉、顧問：佐伯信次）による成果の一部である。なお本稿作成時にあ  
たり、より下の方にはとくに註記をいたいだいた。福岡市立動物園：  
尾崎寅人氏、福岡市都心生物整備区画監修課長：西田雄治氏、同課周  
辺：免震金庫：太田豊氏、福岡市地図編集部課長：成田源子氏。  
感謝して感謝いたします。また本稿の既往の確定にあたっては、第  
8回進歩地質研究会（1987年4月18日、福岡地理センター）での  
高見真紀氏（筑波大学人文科学系）の発表、「大拂尺閏および軒字真  
の分析」から原形を取った。

## 博多第57地点の地形と地質

磯 望

(西南学院大学文学部教授)

### 1. 地形と地質の概要

博多遠跡群は、那珂川と比恵川（御笠川）の河口部に形成された福岡平野の北部に位置する。福岡平野の博多湾沿岸部は繩文海進によって海城となつた地域であるが、その後沿岸部に砂州や砂丘が形成されて陸化し、海岸平野を形成している。これに対して、福岡平野の南部は、須玖火止灰として知られる Aso-IV 大噴流に覆われた中位段丘（台地）と、これを侵食した後に形成された河成段丘と沖積低地から構成される。

調査地点は北部の海岸平野と南部の沖積低地の接する位置にある。調査地点の北側には、万行寺付近を最高所とする微高地が東北東方向に延びる（図1）。また遺構や遺物を含む盛土を除いた埋没地形の等高線図でも北側に海拔3m程度の高まりが存在していたことが確認される（図2）。この微高地（埋没砂丘）に囲まれて、比恵川は石堂川の人工的開削以前には西流して那珂川に注いでいた。

明治33年測図の2万分の1地形図「博多」では、比恵川左岸の水路はすべて調査地点付近で合流してから那珂川に注いでいることが確認できる（図3）。のことから、調査地点付近は最近まで地形的な同地をなしており、16世紀まで存在していた旧比恵川と那珂川との合流点は、調査地点の近傍に位置していた可能性が高いことがわかる。調査地点の周辺の弥生時代以降の地形は、海岸平野背後の低地ないしは氾濫平野としての低地の性格を維持してきたことになる。

博多遠跡群周辺の表層を構成する地層は、沖積層から構成される。その内容については、下山（1989）によつて詳しく検討されている。北部の博多湾岸の沖積層は、陸成堆積物からなる住吉層下部層、繩文海進期の海成堆積物である博多湾シルト層が覆い、その上を海浜砂や風成砂からなる

箱崎砂層が覆うという累積関係にある。これに対しその南部では繩文海進期に海城とはならなかつたために、博多湾シルト層以上の地層を欠いており、基本的には住吉層のみから構成される。

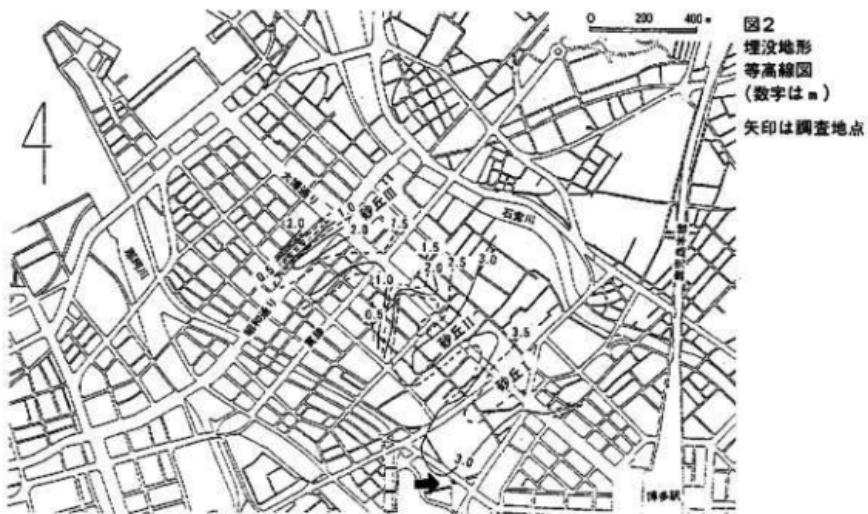
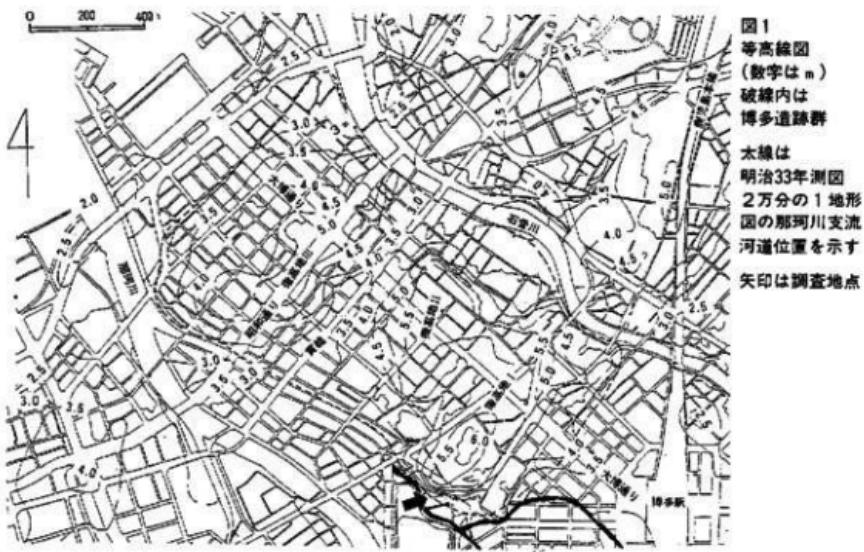
調査地点は地質的にも半野の南北の境に相当し、箱崎砂層分布の南限附近に位置している。この付近のボーリング資料からは、博多湾シルト層の同時異層である泥質の住吉層中部層が認められており、繩文海進による陸域と海城の境界部であったことをうかがわせる。

### 2. 調査地点の断面の観察

調査地点の表層の模式的な断面図を（図4）に示す。断面のうち自然堆積した地層は、下部にシルトのバンドを交えた褐色砂層（海拔標高1.05m未満・以ド下部砂層と称す）、これを覆う層厚30cm前後の黒泥質砂層と、これを覆う砂礫層（海拔標高2.1m未満・以下上部砂層と称す）から構成されている。

下部砂層は中粒の比較的角の取れた砂を主体としており、砂の特徴は箱崎砂層の海浜砂に該当するものであるが、一部に斜層理の発達が認められるため、箱崎砂層の再堆積した河成堆積物（住吉層上部層）の可能性が大きい。この層のシルト質部分からは、中世の遺物も出土しており、下部砂層堆積の終了が中世以降になると考へられる。その時代の海岸線の位置と堆積高度からは、海浜砂の堆積する環境にあったとは考へにくく、再堆積砂と判断されるべきであろう。

下部の黒泥質砂層は有機質に富むが、マトリックスは砂質で小穂も交える。また近世の遺物も出土する。この地層は、墨泥の存在で示されるように、淡水の帶水城に堆積した地層と判断されるが、砂疊層であることから閉塞した水域ではなく、多



少の水の流れ込みが期待できるような環境で堆積したものと判断される。この層に含まれる花粉については、別途分析した。

上部砂層が堆積する前に、前述の帯水域の一部は下部盛土層の埋め立てによって消失した。上部砂層は、円周度の小さい角ぼった礫や周囲の盛土などを多く含む黒褐色の砂礫層で、斜層理の発達がきわめて明瞭であった。上部砂層は、その色調からは2層に細分されるが、堆積物の特徴には大

きな差異は認められなかった。斜層理は、西~北西方向に6~15度傾き、那珂川方向へ向かう掻流力の大きい水流の存在を示している。この層は洪水中時に堆積したものと判断される。

その後、断面図南寄りの石垣の形成と上部盛土層の埋め立てが行われ、最後に断面図南側の石垣壁などによる埋め立てが行われたものと解釈される。なお図の南側は、石垣形成後も埋め立てられるまで両道として利用されていたものと考えられる。

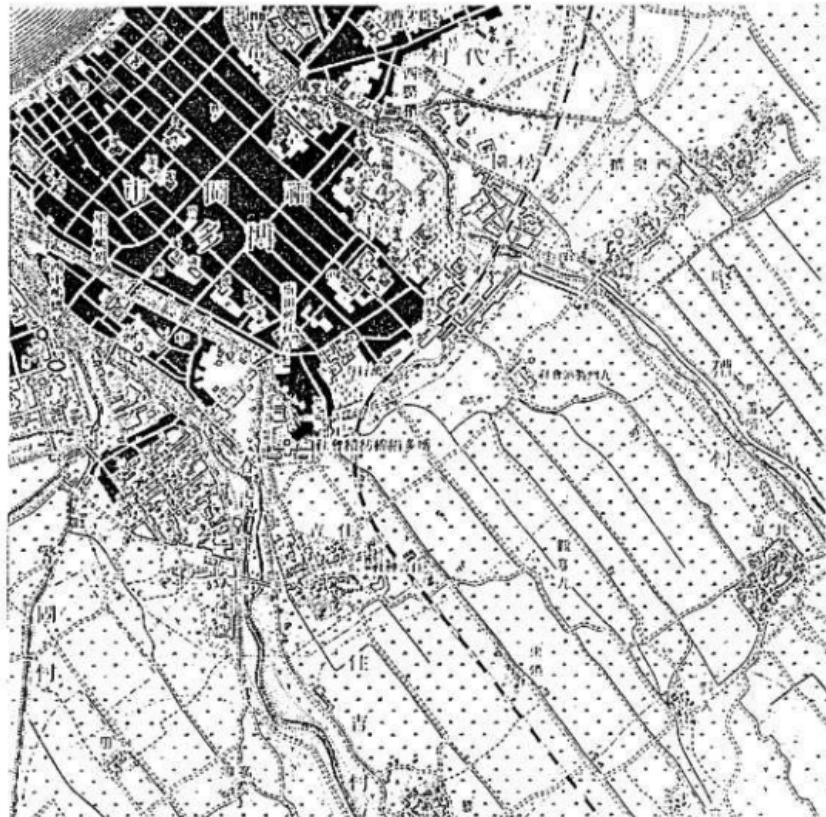


図3. 明治33年測図の2万分の1地形図（陸地測量部発行）  
(矢印は調査地点)

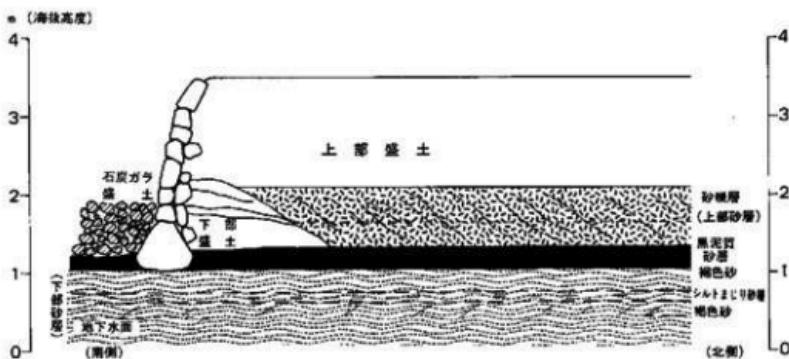


図4. 第1トレンチ西壁土層断面模式図

### 3. 調査地点の地形・地質環境

以上に述べた地形地質の特性から、この地点の環境は次のように変遷したものと考えられる。

- ① 繩文海進の最後の極大期（約3,000年前）には、調査地点のすぐ北側まで海が入り、北東側に砂州と砂丘を形成した。しかし、調査地点までは海は入らず、那珂川の河口部を形成した。
- ② その後、中世までは比恵川の氾濫原となり、調査地点北側の砂丘を侵食した砂が、比恵川の氾濫に伴って堆積した（下部砂層）。
- ③ 戦国時代に、右堂川と房州繩の開削が行われ、調査地点は、堀またはこれと関連する流路と

なった（黒泥質砂層）。

- ④ 近世以後に流路は盛土（下部盛土）によって分断されたが、北側には洪水氾濫により土砂が流入した（上部砂層）。
- ⑤ その後流路は調査地点の南側にだけ残されて北側は埋め立てられ石垣で固定されたが、後に南側も埋め立てられた（上部盛土）。

### 参考文献

- 下山正一(1989)：福岡平野における繩文海進の規模と第四紀層、九人理研報（地質）、16、37-58。

## 博多第57次地点の花粉分析

野井 英明

(九州大学理学部研究生)

### 1. はじめに

今回行われた房州場の調査の一環として、房州場の周辺の植物環境について、花粉分析による推定を試みた。

花粉分析に用いた資料は、第1トレンチ西壁における第4層の黒泥状堆積物から採取した。

### 2. 結 果

本試料の花粉分析によって、下表に示すように、21分類群の花粉化石が検出された。木本類ではマツ属が全木本類花粉の79.4%を占め優占する。マツ属以外の木本類は比較的低率であり、シイ属、アカガシ属、エノキムクノキ属、スギ属が数%ずつ出現するほかは、ナギ属、シテ属が1%未満の出現率を示すにすぎない。草本類では、イネ科が99.1%、タネツケバナ属が193.0%とこれら2分類群が高率で出現し、優占する。これら以外の草本類は、タデ属、アカサ科などの雜草類が10数%ずつ出現するが、そのほかの分類群は10%未満である。また、ソバ属が低率であるが検出される。

### 3. 考 察

花粉組成から推定される当時の環境は、次のようにまとめられる。木本類ではマツ属が優先し、

祇園町房州場跡 花粉分析結果

#### AP 木本類花粉

<i>Pinus</i> マツ属	79.4	<i>Cryptomeria</i> スギ属	3.5	<i>Podocarpus</i> ナギ属	0.4
<i>Carpinus</i> シテ属	0.4	<i>Coccinia-Aphananthe</i> エノキムクノキ属	3.9		
<i>Ulmus-Zelkova</i> ニレ-ケヤキ属	1.8				
<i>Cestrumopsis</i> シイ属	6.2	<i>Cyclobalanopsis</i> アカガシ属	4.0		

#### NAP 草本葉花粉

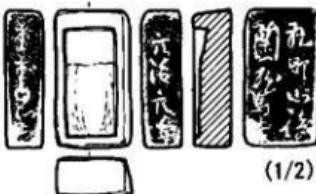
<i>Ligustrum</i> イボタノキ属	0.4	<i>Ilex</i> モチノキ属	0.4
<i>Gramineae</i> イネ科	99.1	<i>Cyperaceae</i> カヤツリグサ科	0.4
<i>Typha</i> ガマ属	4.0		
<i>Artemisia</i> ヨモギ属	3.6	<i>Compositae</i> キク科	6.2
<i>Polygonum</i> タデ属	13.2	<i>Chenopodiaceae</i> アカサ科	13.7
<i>Fagopyrum</i> ソバ属	1.8		
<i>Caryophyllaceae</i> ナデシコ科	7.9	<i>Cardamine</i> ネツケバナ属	193.0
<i>Umbelliferae</i> セリ科	1.8		

#### FS シダ類花粉

<i>Gleicheniaceae</i> ラジロ科	20.3	<i>Monolete</i>	46.0
		<i>Trilete</i>	26.3

この地域の潜在自然植生である照葉樹林を構成するシイ属やアカガシ属が低率であることから考へると、当時の人々は、照葉樹林を伐採し、薪を採取したり、跡地を住居や耕地として利用していたであろう。そのため、自然林はほとんど破壊され、その後にバイオニア植物として生えるマツが生育していた。また、検出される木本類花粉の種類が少ないと考えられる。草本類のうちイネ科花粉は、位相差顕微鏡による観察によると、多くがイネの花粉であり、草本類で最も高率で出現するタネツケバナ属は水田の雜草として最も普通のものである。このことから考へると、房州場は機能を停止した後は、水田として利用されていた可能性が高い。仮にそうでなくとも、少なくとも、房州場周辺には水田が存在していたと考えられる。また、低率であるが、ソバ属花粉が検出されることから、房州場周辺では農耕が営まれており、その作物としてソバも栽培されていたであろう。タデ属、アカサ属を始めとする雜草類が比較的多く出現することを考慮すると、房州場周辺は、隣境の人工的改変がかなり盛んな地域であったであろうと考えられる。

数字は木本類花粉を基準とする百分率を示す。



(1/2)

福岡市埋蔵文化財調査報告書第250集

## 博多22

発行 福岡市教育委員会  
(福岡市中央区天神1-8-1)

発行年月日 平成3年3月15日

印刷 赤坂印刷株式会社

表紙・裏表紙の写真は奥村玉藻「筑前名所図会」(福岡市美術館蔵)の「吉祥寺社・普益権院」、「作出町の園」である。

作古

